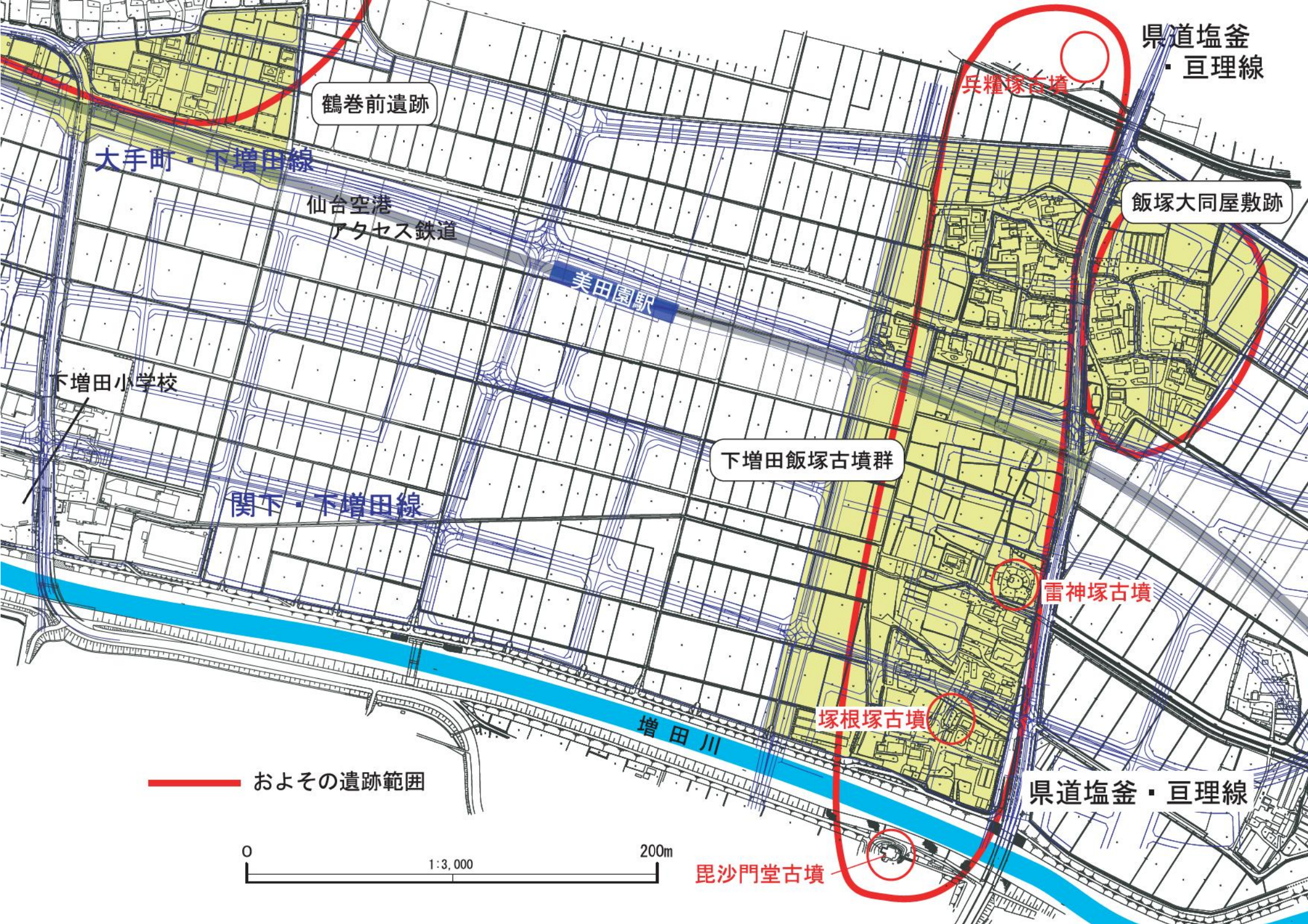


①【調査した遺跡】

臨空都市の整備にあたって平成 16 年度～平成 20 年度の 5 カ年で実施
した^{しもますだ}下増田地区を中心とする発掘調査では、^{まちうらいせき}町裏遺跡・^{つるまきまえいせき}鶴巻前遺跡・
^{しもますだいいづかこふんぐん}下増田飯塚古墳群・^{いいづかだいどうやしきあと}飯塚大同屋敷跡の調査を行いました。これらの遺跡
からは、古墳時代・平安時代・鎌倉時代・江戸時代などの遺構や遺物が
発見されており、中でも下増田飯塚古墳群からは、古墳時代の遺構や遺
物が多く発見されています。今回の展示では、下増田飯塚古墳群・飯塚
大同屋敷跡での発掘調査の成果について紹介いたします。



県道塩釜
・巨理線

飯塚大同屋敷跡

鶴巻前遺跡

大手町・下増田線

仙台空港
アクセス鉄道

美田園駅

飯塚大同屋敷跡

下増田小学校

下増田飯塚古墳群

関下・下増田線

雷神塚古墳

増田川

塚根塚古墳

県道塩釜・巨理線

— およその遺跡範囲

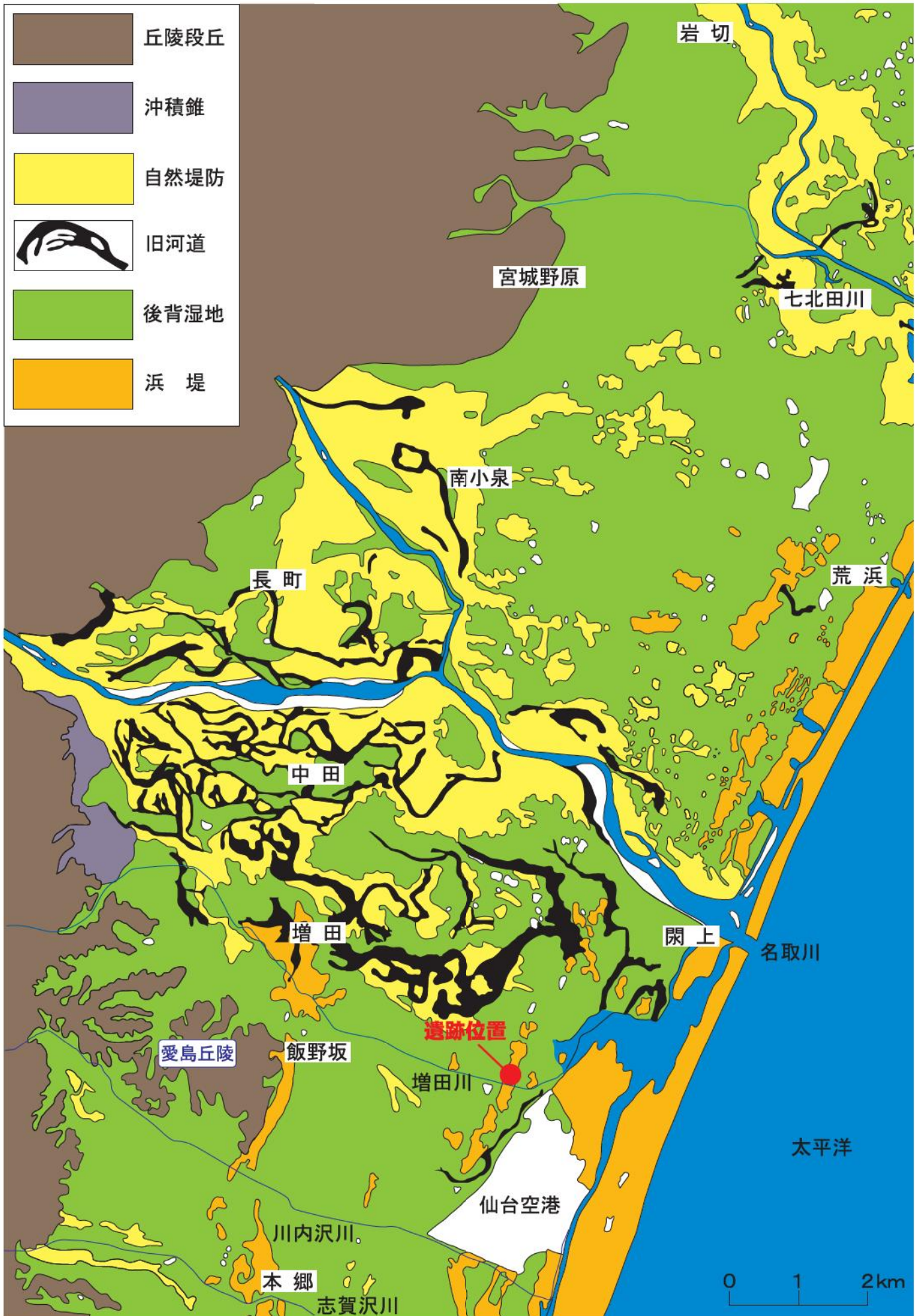
0 1:3,000 200m

毘沙門堂古墳

下増田飯塚古墳群は、J R名取駅の南東約3～4km 地点に所在する古墳群で、遺跡の中を県道塩釜・亘理線しおがま わたりが南北方向に貫つらぬいて走っています。市内では大きく3列の浜堤列が認められますが、本古墳群は現海岸線から西側約2km付近に南北方向にのびる2列目の浜堤上に立地しています。遺跡が所在する浜堤上の標高は2m前後で、調査のため地面を掘り下げると、標高50cm前後の高さで遺構が見つかりました。

この浜堤の東西両側は、むかしから低湿地が広がっていたものと考えられており、遺跡の周辺はつい最近まで水田耕作が行なわれていた田園地帯でした。

現在の遺跡周辺は、仙台空港アクセス鉄道をはじめてんぼ店舗や住宅地などの建設が行われ、遺跡周辺の景観は大きく変わってきています。



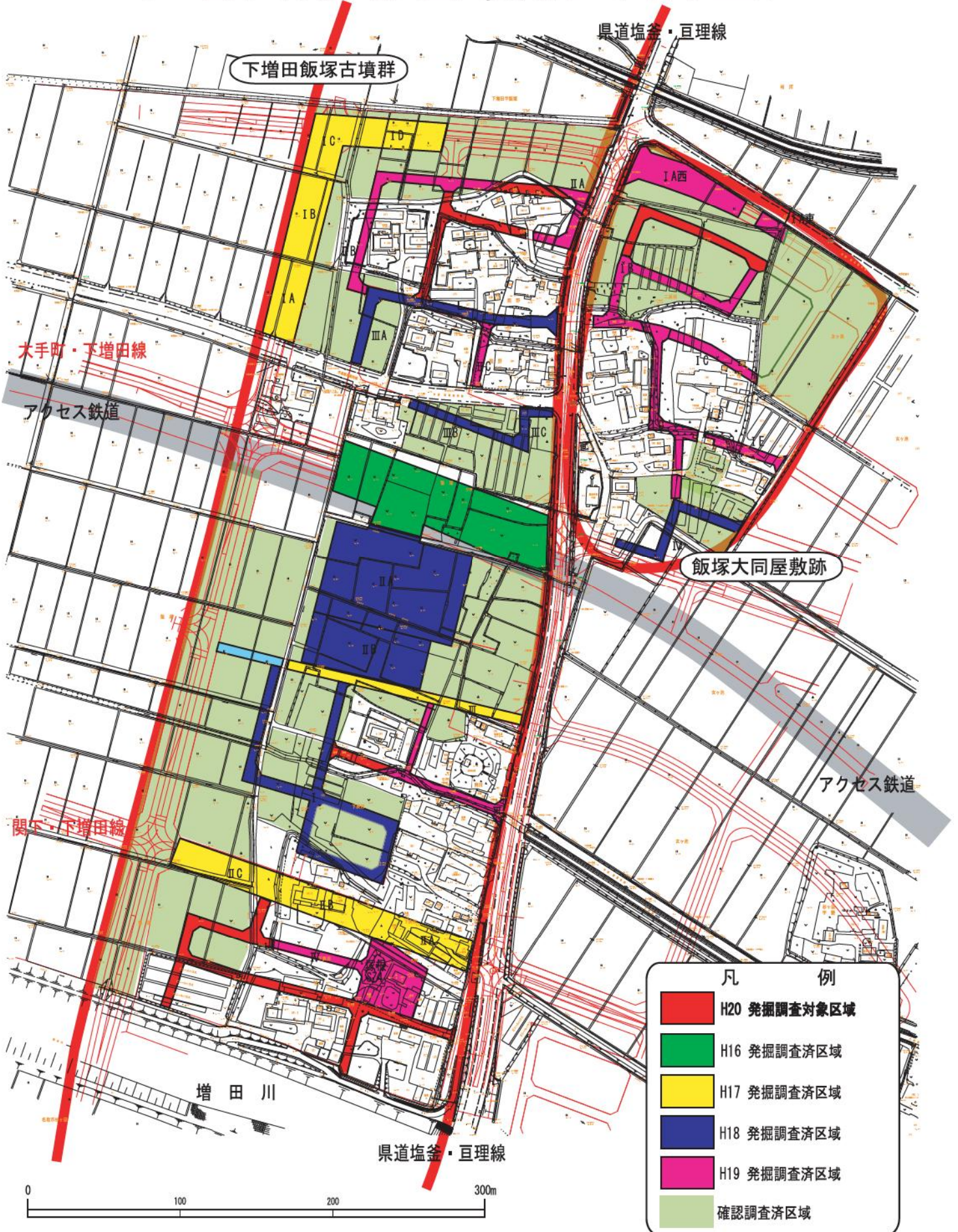
遺跡周辺の微地形分類図

② 【調査した場所】

りんくう と し
臨空都市の整備に先立って行なわれた今回の発掘調査は、下増田飯塚古墳群では、北は下増田字熊野、南側は増田川北側の下増田字下^{しもかのえだ}庚田にかけての南北約 1 km・東西約 500m の範囲を、飯塚大同屋敷跡はその全域を対象に必要な区域の調査を実施しました。実際に調査を行なった場所は、仙台空港アクセス鉄道の路線や、道路・店舗になる部分などで、全体の面積はおよそ 42,000 m²にも及ぶものとなりました。調査にあたっては、年度毎に調査区を^図のように設定して実施しました。

この2つの遺跡からは大きく分けて、古墳時代前期から中期頃（今から約 1,700 年前～1,600 年前頃）、鎌倉・南北朝時代頃（約 800 年～600 年前頃）、江戸時代の後半以降（約 250 年前以降）のものが見つかりました。

下増田飯塚古墳群の調査区



凡 例	
■	H20 発掘調査対象区域
■	H16 発掘調査済区域
■	H17 発掘調査済区域
■	H18 発掘調査済区域
■	H19 発掘調査済区域
■	確認調査済区域

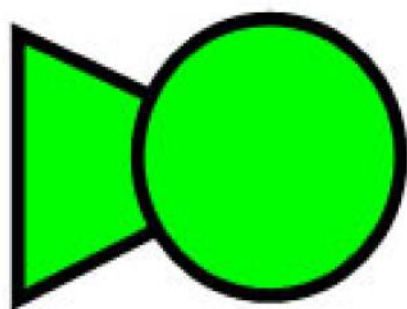
③【海岸部の古墳群 下増田飯塚古墳群】

名取市内には数多くの文化財がありますが、その中でも東北で最も大きな古墳として知られている雷神山古墳をはじめとした、古墳文化に大きな特色があります。

古墳は3世紀後半頃から7世紀にかけて造られた有力者のお墓で、この時期に北海道・沖縄を除く全国各地で20万基以上にも上る古墳が築きずかれたと言われており、その時代を古墳時代と呼んでいます。

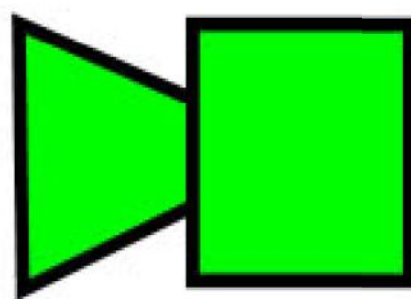
古墳には様々な形がありますが、市内では、ぜんぼうこうえんふん前方後円墳・ぜんぼうこうほうふん前方後方墳・ほうふん えんふん方墳・円墳などの古墳が知られています。一般的には、大きさが大きいものは前方後円墳に多く、ふんきゅう墳丘と呼ばれるつか塚を持つ古墳の中で最も数多

く造られたのは円墳です。



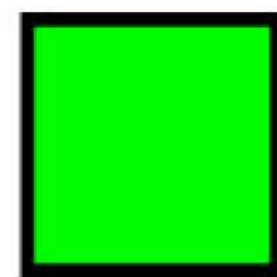
前方後円墳

(雷神山古墳・おおつかやま大塚山古墳など)



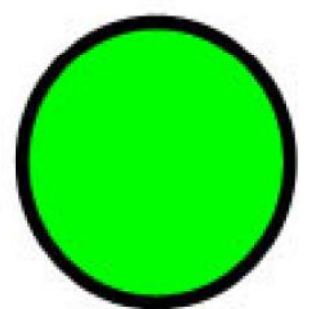
前方後方墳

(飯野坂古墳群など)



方墳

(てんじんづか天神塚古墳など)



円墳

(らいじんづか雷神塚古墳など)

市内の主要な古墳の分布図を見てみると、その多くは愛島丘陵をはじめとする見晴らしの良い丘陵の上や浜堤の上などに分布しています。これらの古墳は、全てが同じ時期に存在していたわけではありません。それは時期によって、多く造られる古墳の形や形態が変化しているためです。今回ご紹介する下増田飯塚古墳群は、これまで本格的な発掘調査が行なわれていなかったため、詳細については分かっていませんでしたが、調査以前から古墳時代中期頃の円墳を中心とする古墳群であると考えられていました。

古墳時代のあゆみ

	弥生時代 4世紀 (301~400年)	前期 5世紀 (401~500年)	中期 6世紀 (501~600年)	後期 7世紀 (601~700年)	奈良時代
名取における 有力者の墓の変遷	方形周溝墓 五郎市遺跡 今熊野遺跡 宇賀崎古墳群	低墳丘墓 方墳・前方後方墳 (高館山古墳群) 飯野坂古墳群 天神塚古墳 雷神山古墳 小塚古墳	円墳・前方後円墳 名取大塚山古墳 経の塚古墳 毘沙門堂古墳 賽ノ窪古墳群 山田古墳	横穴式石室を持つ古墳 群集墳 横穴墓 熊野堂横穴墓群 山の前横穴墓群	
名取の 集落遺跡	山の神遺跡 今熊野遺跡 西野田遺跡	十三塚遺跡 清水遺跡	宮下遺跡 野田山遺跡		
世の中の できごと	渡来人が大陸文化を伝える	ゲルマン人の大移動始まる	倭軍が高句麗に敗れる	倭王武が中国に使いを送る 仏教が伝わる	大化の改新 遣唐使の派遣始まる 聖徳太子が摂政となる

名取市内の主な古墳



- 凡例
- 前方後円墳
 - 方形周溝墓
低墳丘墓
 - 方墳
 - 円墳
 - 前方後方墳
 - 横穴墓群
 - 古墳群の範囲

熊野堂横穴墓群

高館山古墳

天神塚古墳

箕輪A3号墳

箕輪A1,2号墳

今熊野遺跡

賽ノ窪古墳群

十石上古墳

大塚山古墳

一本杉古墳

飯野坂古墳群

下増田飯塚古墳群

兵糧塚古墳

雷神塚古墳

塚根塚古墳

毘沙門堂古墳

経の塚古墳跡

五郎市遺跡

宇賀崎古墳群

山の前横穴墓群

小塚古墳

雷神山古墳

かめ塚古墳

温南山古墳

大正14年刊行の『名取郡誌』には、遺跡の周辺に「下増田七塚」と呼ばれる7つの塚があったとの記事が記されており、以前からその存在が知られていたことが伺われます。同書によれば七塚とは、北側から順に

①「塚原塚」→②「瀬戸塚」→③「飯塚」
→④「念仏塚」→⑤「庚申塚」→⑥「塚根塚」→⑦「毘沙門堂」

のことであると記されています。調査に着手した平成16年の段階に地表上で確認できた塚＝古墳？は、北側から

「兵糧塚古墳」→「雷神塚古墳」→「塚根塚古墳」→「毘沙門堂古墳」

の4基で、『名取郡誌』の記載と合うのは「塚根塚古墳」と「毘沙門堂古墳」の南側の2基だけでした。また、昭和52年に刊行された『名取市史』では、「飯塚」は大半が崩壊していることや、「庚申塚」が現在の「雷神

塚」にあたることを記していますが、その対応関係は必ずしも明確ではありません。



平成 16 年度から実施した発掘調査では、以前から知られていた 4 基の古墳以外に、古墳やその可能性がある遺構も含めて 20 基が発見されており、仮にその全てが古墳であるとするると古墳群全体では、今現在で 24 基の古墳が確認されたこととなります。

調査前には「下増田七塚」の記事のイメージから、北端の兵糧塚古墳と雷神塚古墳との間に、3 基前後の古墳が見つかるのではないかと予想していましたが、調査の結果、遺跡周辺にはその 3 倍にも上る多くの古墳が存在していたことが明らかとなりました。

また、分布についても遺跡の北側と塚根塚古墳周辺にまとまりがあることが明らかとなり、北側では円墳の他に方墳（方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}や低墳丘墓^{ていふんきゅうぼ}の可能性もある）も見つかるなど、詳しい状況が分かっていなかった海岸部の古墳時代を考えるうえで、貴重な資料を得ることができました。

下増田飯塚古墳群 古墳分布図

兵糧塚古墳

県道塩釜亘理線



仙台空港アクセス鉄道

雷神塚古墳

県道塩釜亘理線




竪穴住居跡

塚根塚古墳

119 4号墳

毘沙門堂古墳

凡例

-  調査前から知られていた古墳(4基)
-  調査で見つかった古墳や、古墳の可能性のあるもの(20基)
-  調査区

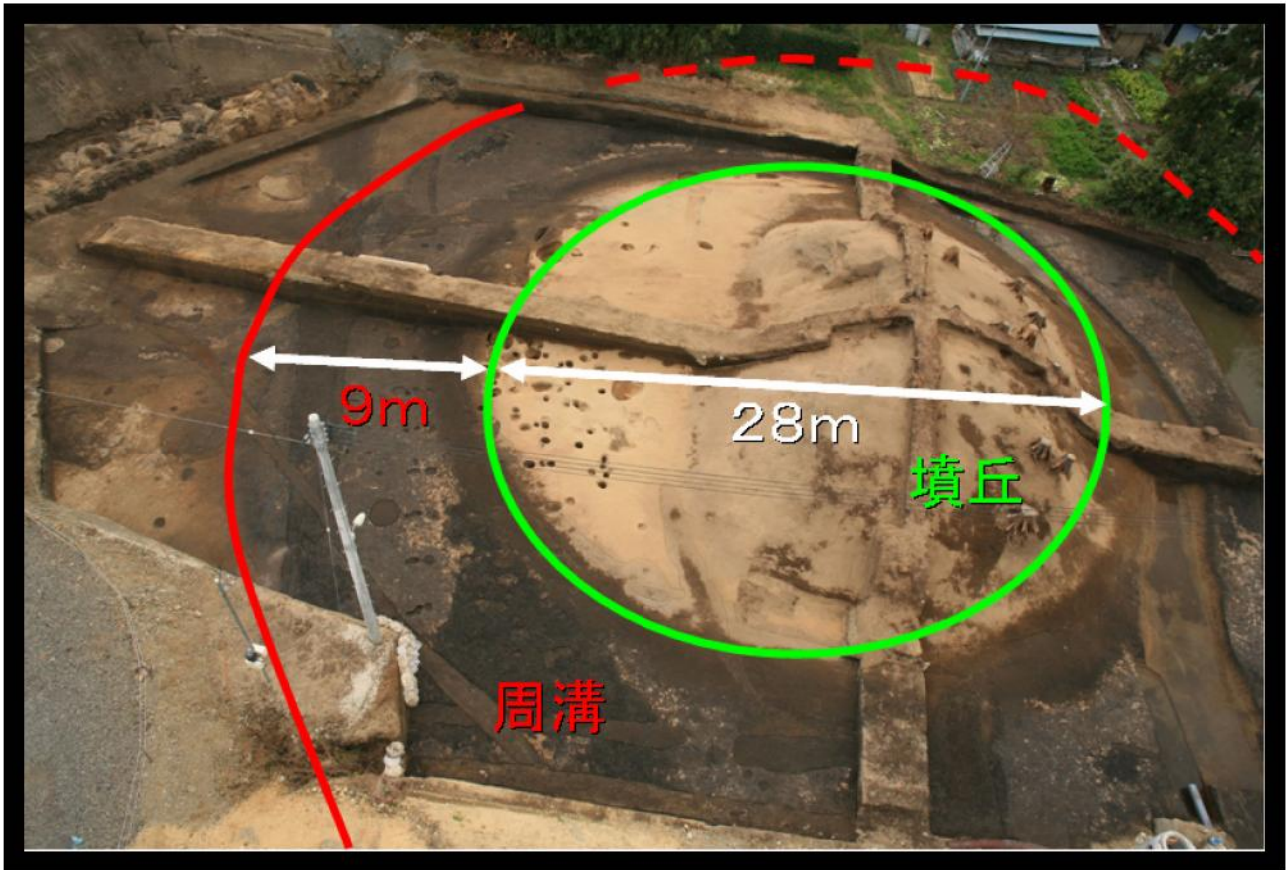
0 1:1500 200m

増田川

増田川

平成 19 年度には、塚根塚古墳の調査を行なっています。塚根塚古墳はこれまでの土地の利用などによって、墳丘の東側半分以上がすでに失われていたことなどもあり、大きさが直径 24m 前後の円墳だと思われていましたが、調査の結果、直径が約 28m・高さ約 4m の円墳で、その周囲に幅約 9m の周溝がめぐるものであることが分かりました。また、遺体を埋葬した痕跡なども見つけることは出来ませんでした。

ところが、墳丘の土の積み上げ方などを調べるために、上の方から墳丘を崩していったところ、塚根塚古墳の墳丘の中から、直径が 7.5m で周囲に幅 2m 前後の周溝を持つ小型の円墳が発見されました。このように 1 つの古墳の中から別の古墳が発見された事例は、現在も調査中ではありますが非常に珍しいものです。



塚根塚古墳のようす



塚根塚の墳丘の中から見つかった古墳（円墳）

塚根塚古墳の中から見つかった小型の円墳からは、遺体を埋葬した跡や遺体と一緒に埋められた副葬品が見つかっています。遺体は木製の棺ひつぎに納められていたと思われ、長さ約 3m・幅約 60 cmの長方形にその痕跡おさが見つかっています。その中からは、鹿の角で作られた飾りが付いた刀が 3 本出土しており、遺体と一緒に棺の中に納められたものと考えられます。また、棺の外側にも、鉄製の鍬やじり、漆うるしが塗られた矢柄ぬと呼ばれる矢の柄の部分などがみつかり、棺に土をかぶせる時に一緒に埋められたものと思われまます。

この他、一部が途切れた周溝の北端付近の底面で、5 枚重ねられた土師器つき坏と呼ばれる浅いお椀状の土器や、中ぐらい大きさの土師器の壺、やや細長い楕円形の石と一緒に出土しており、死者の霊れいをなぐさめるなどのため、何らかの儀式ぎしきのような行為が行なわれたのかもしれない。



棺全体のようす



出土した直刀と鉄の鍬



鉄の鍬と漆が塗られた矢柄



周溝の中で見つかった土師器

下増田飯塚古墳群から南東へ約 1 km の下増田字西^{さいきょうづか}経塚^{きょうづか}には、経の塚古墳と呼ばれる直径 36m・高さ 7m で、周溝を持つ円墳がありましたが、土取りや道路工事などによって墳丘は完全に崩されてしまいました。明治時代や大正時代に行なわれた発掘調査では、2 体分の人骨、鹿の角製の飾りが付いた 2 本の刀、漆塗りの櫛^{くし}などが納められた長持型組合石棺^{ながもちがたくみあわせせきかん}と呼ばれる石製の棺、国の重要文化財にも指定されている家形^{いえがた}・鎧形^{よろいがた}・円筒形^{えんとうがた}の埴輪^{はにわ}などが出土しています。これらの出土品のうち長持型組合石棺・鎧形埴輪については、日本最北の出土例としても貴重なもので、その他の出土品などからも、経の塚古墳が当時の中央の権力者と密接な関係にある人物のお墓であり、およそ 5 世紀後半頃に築造^{ちくぞう}された古墳であったと考えられています。

この経の塚古墳と下増田飯塚古墳群は、位置関係や立地、鹿の角製の飾りが付けられた刀が副葬品として見つまっている点など、密接な関係にある古墳として注目されます。

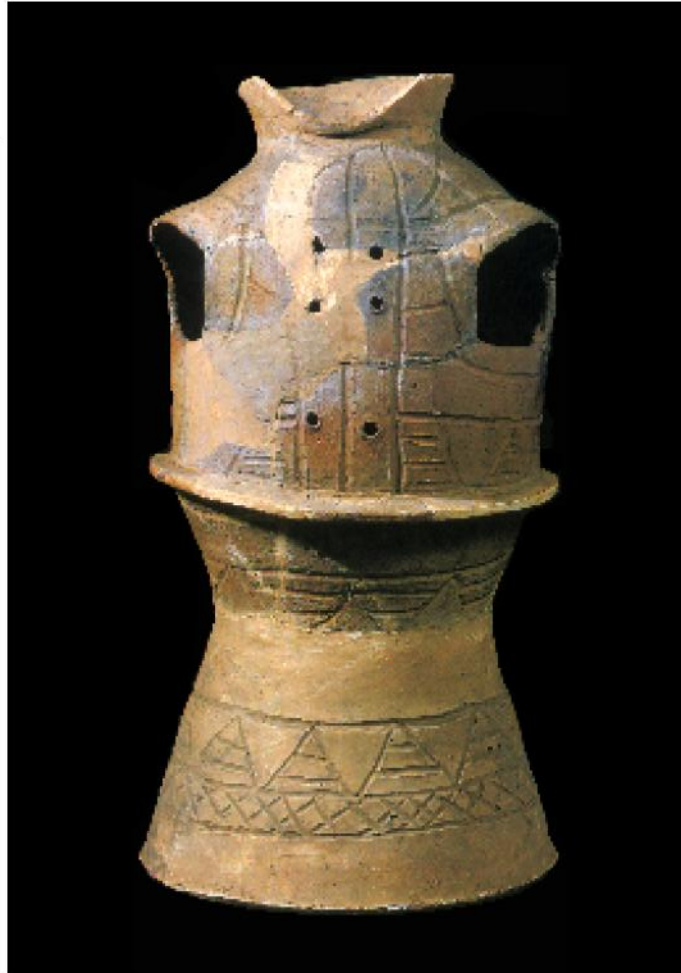


経の塚古墳の跡地のようす

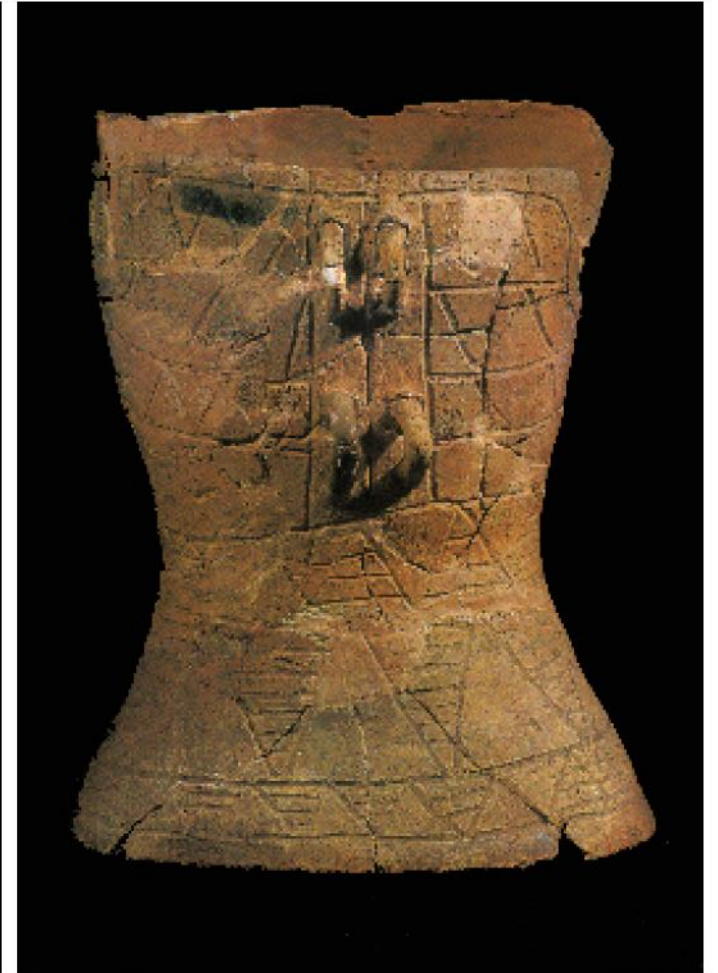
国指定重要文化財



いえがたはにわ
家形埴輪



よろいがたはにわ
鎧形埴輪



塚根塚古墳の北側に隣接して発見された 17 年度 1 号墳の周溝からは、2 個体の須恵器のハソウと呼ばれる変わった形の土器が出土しました。ハソウは器の中程の位置に孔が開けられた壺形の土器で、孔の部分に竹などの軸を差し込んで注ぎ口とした液体を入れるための器です。形や一緒に出土した土師器の坏つきなどから考えると、およそ 5 世紀後半頃（今から約 1、550 年前頃）に焼かれたものと思われませんが、その頃、須恵器を焼くことが出来たのは、近畿地方を中心とする限られた人々であり、東北地方でこの時期の須恵器を焼いた窯跡が見つまっているのは、仙台市のだいにんじかまあと大蓮寺窯跡の他に数例が知られているにすぎません。この 2 個の須恵器のハソウが、どこの窯跡で焼かれてこの古墳に持ち込まれた物なのか詳細は分かりませんが、このような珍しいものを手に入れることが出来たこの古墳の主は、きっと強い力を持った特別な人物だったのでしょう。



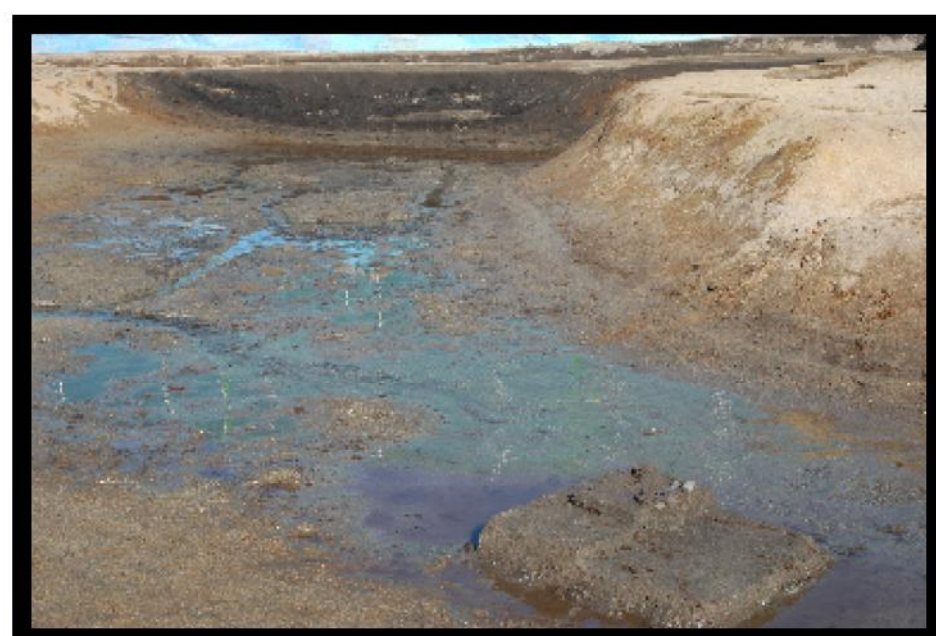
ハソウが出土したH17 1号墳



周溝から出土したハソウ



ハソウが出土したようす



塚根塚古墳の周りでは、古墳以外にも竪穴住居跡などの遺構や遺物が見つかっています。古墳の分布は、遺跡の北東側と塚根塚古墳周辺の2ヶ所にまとまりがありましたが、古墳時代の竪穴住居が発見されたのは、遺跡全体の中でも塚根塚古墳の周りだけでした。見つかった竪穴住居跡は、古墳の墳丘の下から見つかったり、周溝に壊されていたりした古墳時代前期頃（今から約1,700年前頃）のものと、古墳時代中期頃のものの2つの時期のものがみつかっていますが、両方合わせても10軒前後と少なく、大変な労力を必要とする古墳を築いた人々が日常的に生活していた場所は、もっと別の場所にあったのかもしれない。これらの竪穴住居跡の中からも、多くの土器などがみつかっています。



古墳時代中期の竪穴住居跡



古墳時代前期の竪穴住居跡



中期の住居跡の出土土器



前期の住居跡の出土土器